

「普通」を名乗る人々ー北海道の「保守」と関わる、政治人類学的研究ー

伊藤想大

キーワード：保守、普通、ナショナリズム、被害者意識、笑い

要旨

本論文では、「保守」と呼ばれる、または自称する人々が、自らの立場や考えを「普通」と見なし、また「普通」を名乗ることに注目し、その構造を探求すると共に、政治的立場の異なる他者との関わりについて考察することを目的としている。北海道においては、厚別区の百年記念塔解体反対運動や、アイヌにまつわる差別的発信など、「保守」と呼ばれる層が注目される場面がしばしばあり、彼らの攻撃性について理解することは、そのような問題に対して、単純な二項対立や偏見を排して向き合うにあたって有意義であると考えられる。

序論では、研究背景と研究目的を述べる。本研究は筆者自身の「普通」が絶対的なものではないことに気づかされた経験から、「保守」の標榜する「普通」に疑問を持ったことに端を発している。また、本研究は政治活動を実際に行う人々と直接的に関わり、話を聴くことで政治運動やイデオロギーといったトピックを動的に捉えることを目的としている。

2章では、先行研究のレビューを行う。3つの節に分かれており、「草の根保守運動」に関する先行研究、政治人類学における先行研究、また「保守」が依拠する本質主義と、対をなす構築主義についての先行研究をレビューしている。

3章では、フィールドの概要を述べる。今回は「チャンネル桜北海道」と「国守衆北海道」という2つの「保守」系団体を主なフィールド、調査協力者として位置づけている。これに加えて、インターネット番組などでの「保守」の論調も随時観察した。

4章では、調査の概要を述べる。調査の日時や場所、また調査や研究における留意点などについても触れている。

5章は本論となり、6つの節に分かれている。まず、1節で国守衆北海道による街頭演説の観察結果を述べ、行きかう人通りの中で「保守」がどのように受け止められているのか、という点に注目している。2節では「保守」というイデオロギーについて、他の「保守」研究や、「保守」自身による見方などを提示しながら、その定義を模索した。3節では「普通」というキーワードに注目し、普段我々の用いる「普通」について考えた後、インタビューの中でどのような「普通」が登場したのか、またそれがどのような意味をも

ち、なぜ使われているのか、という点について考察する。4節では、「普通」が他者との比較という相対的な文脈で用いられることに注目しながら、「保守」と「右翼」、「パトリオティズム」と「ナショナリズム」という隣接しながらも区別されるそれぞれの対立について、考える。5節では、「保守」系番組において頻繁に見られる「笑い」という現象に注目し、その越境性と普遍性への力を述べながら、そこに隠れた「距離をとる」という機能について考察する。最後に6節では、「普通」という言葉によって示される「弱さ」に注目し、それが特別な権力を持たないという意味の「弱さ」と、明らかな弱者ではないという「弱さ」の2つに分かれていると考え、そこにある「保守」の被害者意識について言及する。

結論では、それまでの議論をまとめ、「保守」が「普通」を名乗る構造を解明しつつ、その先にある、政治的立場の異なる他者との関わりという問いについて考察し、筆者自身の調査やその中での経験などから、自身の意見を述べている。「保守」という立場は多くの人にとって直接的な関わりを感じづらいものであり、また現在の人文社会科学における潮流とは明らかに道を分かつような考えを持った彼らに対して、学術的な立場から批判的な目が注がれることも少なくない。しかし、筆者自身は、だからこそ彼らと関わっていくことが必要であると考えており、その関わりの中で傷ついたり傷つけたりしながらも、互いに理解していく、という在り方は「普通」であると考えている。